

「導き出した神」

申命記 5:6、ルカによる福音書 24:50-53

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

神さまは今朝もぼくたちに語りかけてくださいます。

これは、十戒の最初に読まれる言葉。

第一戒よりも「前の文」いわゆる「前文」の言葉です。ぼくは、この前文こそが十戒の中で、一番大事な言葉だと思っています。なぜなら、ここに神さまの力強い宣言があるからです。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

これは単なる神さまの自己紹介ではありません。だって自己紹介なら「わたしは神である」で十分です。わたしは神だから、この言葉に従いなさいで済むはず。

でもここは「あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神」という。

「あなた」なしには「神であるわたし」とはおっしゃらない。だから、むしろここには宣言的な意味があります。「わたしはあなたの神となったんだ」、「わたしはあなたを救い出したんだ」と。あるいは主語を変えればこうも聴けます。「あなたはわたしの民なんだ」、「あなたはもう救い出されているんだ」。

第一戒よりも前に、この「救い」の宣言があるんです。

その後「十戒」がはじまる。やはりこの順序が大事です。十戒が先あって、これを守れたから救うという「条件」じゃない。竹取物語のかぐや姫は、夫なる候補者にさまざまな試練を与えて、それに答えられたものと結婚するといったそうですが、神さまはかぐや姫のようにはなさらない。もう先に「結婚」してしまうようなことをされるんです。一緒に生きることを宣言してしまう。もう救ってしまうんです。そこから幸せに生きる道筋を示してくださる。

もちろん、これは教会に生きるぼくたちはよく知ることです。

自分が神さまから愛されイエスさまに救われている。でもです。そうやって神さまを信じて生きることがときに「重荷」になってしまうことがある。なんだかしんどいと思ってしまうことがある。「こうしなければいけない」。「ああしなければいけない」。十戒の戒めじゃないですけれども、気づけばいろんな戒めに囲まれているような気がする。「日曜日に教会に行かなきゃいけない」。「奉仕しなきゃいけない」。そんな思いになってしまうことだってあると思います。クリスチャンとしてちゃんとしてなきゃいけない。毎回毎回悔い改めをして進歩のないような自分を嘆くようなときもあります。

これは、よくある話ですが、しかし、よく考えると不思議なことだと思います。

それはまるで「かぐや姫」を相手しているかのように生きているからです。ちゃんとしないと結婚してもらえないかのように生きている。この戒めを守らなければ、ちゃんとしていなければ、成長しなければ

「神の民」ではないかのように。あるいは「神の民」であることが損なわれたり、取り消されたりするような不安を抱いているように思えるからです。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

神さまがこの前文で宣言されているのは、あなたがたは 100% 「神の民」 だということです。たしかにぼくたちは「神の民」としてちゃんとしていないです。そして、神さまは、ご自分に背を向けて自分中心に生きることを喜ばれません。でも。ちゃんとしてないからあなたがたは「神の民」ではない、とはおっしゃらない。むしろこの十戒を聴く度に、「神の民」であることを思い出すことができるように。ここではつきり宣言しておられます。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

ぼくたちがちゃんとしているから「神の民」なんじゃないんです。神さまが、お見捨てにならない、憐れんでくださるから。神さまが、そう宣言してくださるから、ぼくたちは 100% 「神の民」 なんです。だから、ぼくたちの出来不出来でその事実は損なわれません。ぼくたちが不出来だからぼくたちが 30% しか「神の民」でないとはならない。

神さまは言い逃れをさせてくださいません。

なぜならぼくたちの罪の裁きをイエスさまに負わせる形でぼくたちを救われたからです。ぼくたちの不出来な部分。神さまに背いて生きる醜さも。すべてを織り込み済みで。しかもそれをご自分の独り子が引き受け、赦すことをもって救われたからです。だから 100% 「神の民」 なんです。もちろん、だからといってちゃんとしなくていいなんて無責任な話じゃありません。神さまは罪を憎まれるお方ですから「ちゃんとしなくていい。どんな罪を犯してもいい。何をやってもいい。てげてげでいい」とは言えません。でも一方でぼくたちが抱く「ちゃんとしなくちゃダメ」というのもこれは嘘になります。ぼくたちの「ダメだ」「ダメだ」という声はいつの間にか神さまの「宣言」をかき消してしまうからです。その宣言に耳を塞いで、神さまとともにいることを重荷にしてしまうからです。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

ここで言われていることは「ちゃんとしなくても『神の民』だ」ってことです。「ちゃんとしていないあなたも『神の民』」 なんです。実際これを最初に聞いた旧約のイスラエルの民も十戒が守れた民ではありませんでした。十戒を授かる前もそうですし、授かった後もそうです。でも神さまは、その民にこそ語りかけるんです。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

この神さまが憐れみをもって宣言してくださるからこそ、あなたは「神の民」 なんです。少し乱暴に聞こえるかも知れませんが、それ以外いいようがないと思います。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

ぼくたちの努力や進歩ではない。神さまのこの宣言こそが、ぼくたちを「神の民」とし続けます。

ぼくたちを「神の民」として生かし続けてくださる。いや、神さまご自身がぼくたちの「神」であり続けてくださる。あなたなしで「わたし」とは言わない。あなたとわたしは結ばれている。そう宣言し続けてくださる。だからこそ、ぼくたちは、厳しく自分を責めすぎることなく、しかし無責任になるのでもなく健やかに「神の民」として歩み続けることができます。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

この宣言をなさる主は、かつてこの旧約の民を「エジプトの国」から導き出されました。

「エジプトの国」。これは、当時、最も文明の栄えた国家の名前のひとつです。それは、民が自分たちでは抜け出せるとは微塵も思えない国の名前です。しかし、民はこっそり抜け出してきただけというわけではありません。王でありイスラエルの民を奴隷として手元に置き続けたファラオは、最後までかたくなに民を解放しようとはしませんでした。そうであるにもかかわらず、ファラオを認めさせる形で、ファラオに降伏させる形で、民は堂々と導き出されていったんです。ぼくたち単純に、これを「アメリカ」とか「ロシア」とか「中国」とかそういう名前を当てはめてもいいかもしれません。国家の支配です。自分たちじゃ絶対に覆すことができない。絶対に無理だと思う相手の名前です。そういう力ある相手から神さまは、自分たちを導き出してくださった。だから**「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」**。この言葉には、わたしは、あなたを「絶望」から救った。そういう希望にひらかれた響きがあります。

イエスさまを信じるぼくたちにとっての「エジプト」は「罪の支配であり死の支配」です。

イエスさまは十字架の死と復活によって「罪の国、死の家」から導き出してくださった。罪も死も。ぼくたちが自分たちじゃ絶対に覆すことができない力です。まさにぼくたちから希望を奪い諦めさせ虚しくさせる。ぼくたちを奴隷にする力そのものです。

ぼくたち教会には多くの課題があります。

少子高齢化や後継者不足。経済的な問題に教勢低下、伝道の不振。数え始めたらキリがない。あるいはこの国や世界の将来も同じ。あるいは一人ひとりの人生だってそうです。悩みや不安は尽きません。息が詰まりそうになってしまうことが多くあります。なにかの奴隷になっているような気持ちになることがよくあります。それこそ、悪や罪、人間の弱さや欠け、虚しさ、死だけが確かなんじゃないか。そんな思いにとらわれることが多くあります。

しかし主は語ります。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」。

ぼくたちを罪と死の支配から導き出されるイエスさまは、まさにこの罪と死を通してこられたお方です。罪と死を一時的に弱めて、こっそり抜け出してきただけではありません。正面から向き合っただけでなく、ついでに取り組んでこの罪と死を力なきものとされたんです。

「エジプトの国」にある閉塞感。

この「立ちどかる壁」の前にかつて旧約の民は絶望しかできませんでした。あるいはエジプトを出た後も何度も何度も「壁」に直面してきた民でした。でもです。「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプト

の国、奴隸の家から導き出した神である」。こう宣言してくださる主を仰ぎ見るとき。それらが「壁」ではないことを知っていったんです。主が打ち破ってくださるからです。

ぼくたちは必ず「罪」を犯し、必ず「死」にます。それはまるで「壁」の内側で死んでいくようです。息苦しい奴隸のままで死んでいくように見えるかもしれません。

しかし復活のイエスさまは、この「壁」に風穴を開けてくださっています。

罪も死も、ぼくたちを立ち止まらせるものではなくなりました。この罪も死は「壁」でなく「通過点」とされたんです。ぼくたちは礼拝をする度に、息を吸い込みます。もはや罪と死という「壁」が壁じゃないことを確認するからです。礼拝でイエスさまがその血潮によって「あなたの罪は赦された」と言ってくださるから。このイエスさまが、この罪の重荷を代わりに担ってくださっていたと知るから。自分の惨めさから立ち上がって生きることができる。「罪」という「壁」はぼくたちにとっても「通過点」となっています。あるいは復活のイエスさまを礼拝するとき、この壁の先にある神の国に漂う新鮮な空気を吸っているんです。その破れた壁の向こうにある神の国をみる。その神の国の旋律にあわせて歌を歌うんです。

教会にも多くの課題があり、世界にも人生にも多くの苦難があります。

でもそれはもはや「壁」ではない。「通過点」なんです。「エジプトの国」が旧約の民の通過点とされたように。代々の教会は、あらゆる苦難、困難を経験してきました。しかし、それが「通過点」とされてきたんです。

宮崎中部教会も今月で無牧師の期間を終えます。

これも、まさにひとつの立ちどころ「壁」でした。しかしその苦難から導き出す主がおられることを知るときだったのではないのでしょうか。これからも多くの「壁」に直面することがあるかもしれません。でもぼくたちは、それが壁ではなく「通過点」とであると信じることができます。ぼくたちを罪と死から導き出された神、イエスさまがおられるからです。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隸の家から導き出した神である」。

エジプトから導き出した主は、いまもぼくたちを導いてくださっています。この道は、神の国の完成へと続いていきます。ぼくも今月で代務を終えますが、同じ道を共に歩んでいくことはこれからも一緒です。そして、イエスさまが再びこられ神の国が完成する日も一緒に迎えます。ぼくたちを導き出されたイエスさまを仰ぎみ、褒めたたえながら、歩んでいきたいと思えます。祈りましょう。

「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隸の家から導き出した神である」。

力強く宣言してくださる父なる神さま。あなたは、ぼくたちの直面するあらゆる苦難や困難、罪と死からも導き出してくださいます。感謝いたします。さまざま課題や閉塞感があります。しかしそれらをあなたが打ち破ってくださることを信じます。どうぞ、神の国の完成まで導いてください。ぼくたちを導き出してくださった復活のイエスさまを仰ぎ見歩むものとしてください。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。